

「御用留」の性格と内容（六）

——武州荏原郡上野毛村「御用留」の検討——

森 安 彦

目 次

はじめに —— 史料論の一視点 ——

- 一 「御用留」の機能と成立
- 二 上野毛村「田中家文書」と「御用留」
- 三 享保五年～寛政六年「御用留」の検討
- 四 寛政七年～文化四年「御用留」の検討
- 五 文化四年～文政四年「御用留」の検討
(以下一九号)
- 六 文政四年～文政一三年「御用留」の検討
(以下二二号)
- 七 文政一三年～天保一二年「御用留」の検討
(以下二三号)
- 八 天保一三年～嘉永四年「御用留」の検討
(以下二三号)
- 九 嘉永五年～安政七年「御用留」の検討
(以下二四号)

「御用留」の性格と内容（六）（森）

二〇 万延二年～慶応三年「御用留」の検討

- (一) 「御用留」の存在状況
幕末の政局と領主井伊家
- (二) (1) 井伊直弼死去後の井伊家の動向
(2) 和宮下向と井伊家世田谷領の加助郷
(3) 生麦事件と世田谷領への波及
(4) 幕長戦争と井伊家の出陣
- (三) 幕末期の治安動揺
浪人・無宿の横行
- (四) (1) 佐野騒動・天狗党の乱
(2) 関東取締体制の強化
(3) 組合村の武装化指令
(4) 兵糧方下役と組合村の武装化
(5) 井伊家世田谷領の砲術稽古
(以上本号、未完)

一〇 万延二年～慶応三年「御用留」の検討

(一) 「御用留」の存在状況

本章では、武州荏原郡上野毛村（現在、東京都世田谷区内）名主田中家文書の「御用留」のうち、万延二年（一八六一、文久元年）から慶応三年（一八六七）まで七年間の「御用状留記」七冊を検討対象としたものである。⁽¹⁾

小稿対象の上野毛村「御用留」七冊の表題年月、表題、収載年月、収録項目数等を一覧にしたものが第1表である。これによると、この期間の「御用留」の表題はすべて「御用状留記」に統一されており、収録項目数は文久三年（一八六三）が一三八項目、慶応二年（一八六六）が一五七項目、同三年が二二三項目となり激増している。

小稿の対象となった七年間は、二六〇年余にわたる長期政権であった徳川幕府が滅亡し、明治維新による近代日本誕生の陣痛期ともいうべき時期である。それ故、「御用留」の記載も、これらの大変動を反映して複雑多岐となっている。

文久元年一月には、世田谷領村民は和宮下向による臨時の大人足動員を勤めたり、同二年一月には領主井伊直憲が「桜田門外の変」の責任を問われて、五〇日間の閉門と高一〇万石の没収という処罰を受け、世田谷領村々でも年賀や松飾りをいっさいとり止めの正月を送った。文久三年には、朝廷の意をうけ、幕府も横浜鎖港など攘夷政策をとったため対外戦争の危機が一挙に高まり、江戸府内から多くの人や荷物が世田谷領村々に疎開してきた。慶応元年七月から、内外の危機に対応するため世田谷領でも富農らを中心に高嶋流の砲術稽古が開始され、稽古人は領内の治

第1表 万延2年～慶応3年武州荏原郡上野毛村「御用留」

番号	表題年月	表題	収載年月	収録 項目数	備考
1	万延二年正月 吉日	御用状留記	万延2年正月～ 文久元年12月	86	2月に文久と改元
2	文久二年正月 吉日	御用状留記	文久2年正月～ 同年12月	117	文久元年10月2項、11月1項、 12月5項を含む
3	文久三年正月 吉日	御用状留記	文久3年正月～ 同年12月	138	文久2年11月1項、12月1項を 含む
4	文久四年正月 吉日	御用状留記	文久4年正月～ 元治元年12月	119	2月に元治と改元、文久3年12 月20項を含む
5	元治二年正月 吉日	御用状留記	元治2年正月～ 慶応元年12月	117	4月に慶応と改元
6	慶応二年正月 吉日	御用状留記	慶応2年正月～ 同年12月	157	慶応元年12月7項を含む
7	慶応三年正月 吉日	御用状留記	慶応3年正月～ 同年12月	213	慶応2年10月4項、12月8項を 含む

安を担当し、世田谷歳市の巡察や同二年六月の武州世直し一揆に際しては警備のため出動した。

本章では、幕末動乱の政局が村段階にどのように波及しているかの視点から、領主動向や治安体制の動揺とそれに対する支配強化等を「御用留」の記載からうかがってみた。このほか、物価高騰や莫大な献金問題等多くの課題が「御用留」の中に含まれ興味が尽きない。

(二) 幕末の政局と領主井伊家

(1) 井伊直弼死去後の井伊家の動向

幕府の独裁権力の強化に努めた井伊直弼が「桜田門外の変」で倒れると、幕政の動向は公武合体路線となった。これに反対する尊王攘夷運動も激化した。直弼の後継者となった子供の子孫は幕府路線に忠実に従い井伊家の存続を図った。

本書の中にも領主井伊家の動向が詳細に記載されている。

万延二年（一八六二）の「御用状留記」の二月二十五日には、直憲が「尾張中納言之御養方御大伯母劔姫様御縁組被為蒙 仰、恐

悦之御事二候」とあり、「御屋敷御家中衆^江可被相達候」とある（一二項）。

ここで注目されることは、「御屋敷御家中衆」のみならず、村の「御用状留記」にも記載されていることである。

直憲は文久二年（一八六二）三月に幕府の使として上京し、宮中に参内し、従四位上に叙任され、中将に昇進したが、この動向が次のように記録されている。

文久元年（一八六二）十一月に上野毛村名主七左衛門から世田谷領代官に宛て「殿様御上京御用御供仕」るもの「村内篤と入念取調候処、右御供奉願上候もの無御座候」と届け出ている（八六項）。

さて、文久二年の「御用状留記」の四月六日には、三月二五日に参内し、「御使御首尾能被遊 御勤被為 拝龍願殊 天盃 御頂戴被遊」とある（三五項）。三月二八日には「御参内被遊候処、被為拝 龍顔御返答被 仰出 御首尾能 御暇被為蒙 仰、御太刀御拝領」、「且又可被 叙任 従四位上中将与 御官位御昇進被 仰出、此段は 御帰府之上 上意次第 御請可被 仰上旨被 仰達候」とある（三七項）。さらに翌三月二九日には「御参内 御酒饌 御頂戴舞楽御拝見、万端 御首尾能被遊御勤候」と無事任務を終了したことが飛脚で伝えられている（三六項）。こうして四月一日は京都を出発して「御発駕被遊」れ、四月一九日には江戸屋敷に帰館したのであったが（四一項）、その直前の一七日には、世田谷領の村々から百姓二七人が「御帰府前御用多ニ付」「東御台所」へ動員された（四〇項）。井伊直憲は文久二年十一月二日には桜田の変の責任を問われて 五〇日間の閉門と高三五万石のうち近江本領において一〇万石を幕府に取り上げられるという処罰を受けた。それ故翌文久三年の正月行事をどうすべきか、「暮廿八日御領分一統集会相談之上年礼之儀伺候所、外飾・年礼等不相成段被仰聞、大場様^江三日御年頭伺候所、是又出不及段被仰聞、右之段村中^江相触申候間年礼無之候、尤寺院方^江ハ質素ニ致し出申候事」（文久三年「御用状留記」冒頭記載）とあり、閉門中は正月の松飾りや年礼等中止していることがわかる。

文久三年正月二日には瀬田村名主長十郎より、次のような趣旨の井伊直憲の達書が世田谷領村々へ廻達された（六項）。

此度從 公辺 御先代様御勤役中之儀ニ付御咎被 仰出、就中公武御合躰ニも差響被為惱 宸襟候御儀絶言語恐入候事ニ候（中略）天朝 公辺之御趣意堅く相守、尊王攘夷之大義厚相心得候義專要ニ候（以下略）

これによると、井伊直憲は「尊王攘夷」に組みすることを誓っているのである。こうして元治元年四月一八日には直憲は「中将御還任被為蒙 仰候」（文久四年「御用状留記」五九項）となった。

（2）和宮下向と井伊家世田谷領の加助郷

井伊直弼遭難のあとをうけて、幕政の責任者となったのは安藤信正（磐城平の藩主）・久世広周（下総関宿の藩主）であった。信正らは反幕府勢力結合の中心である朝廷との融和をはかり、幕府の苦境を打開しようとして、將軍家茂のために、孝明天皇の妹和宮の降嫁を策し、公武合体の実現を図った。

文久元年（一八六二）一〇月二〇日、和宮は京都を出発し、東山道をへて江戸へ向った。行旅は二五日を費して一月一五日に江戸城に入った。和宮の下向行列は前古未曾有と言うほどの大袈裟なものであったが、世田谷地方の村々は行程最後の宿泊地板橋宿の助郷人足に徴発された。

万延二年の「御用状留記」には、和宮下向と助郷人足については一五項目にわたり触書・廻状が記述されている。

すでに文久元年八月には、大目付から各大名への触書として、「和宮様御下向之節 御旅館前後共 御旅行三日路程御用之外旅人往来差留可申事」として、「御道筋宿村共枝道・閑道共右二準し留切、御料ハ其所之御代官手付・手代共指出し、私領は領主・地頭々家来差出 御警衛向嚴重二行届候様可被取計候」とあり、世田谷領では九月十日附

で代官所から廻達されている（五一項）。

九月二三日には甲州道中上高井戸宿問屋役所より、「御台様下向ニ付御繼立人馬多分ニ付」甲州道中内藤新宿より府中宿迄の宿々定助郷村々が「御下向御当日前後何日ニ御座候哉、橋板宿^{（マヤ）}江臨時勤込被仰付候趣ニ御座候」「一応為御心得此段御達し申置候」という廻状が出されている（五八項）。

一〇月一六日には中山道板橋宿問屋四名・年寄四名の連名で、「姫君様 御下向之砌多人馬御入用ニ付、増助郷之儀其御村々江当分被 仰付（下略）」という廻状が記されている（六二項）。これを受けて、一〇月二九日には喜多見村・用賀村・世田谷村の三か村の連印で「今般板橋宿過助郷^{（加）}之一条ニ付御相談申上度」という出会の触書が廻された（六五項）。

一一月朔日には「和宮様御下向ニ付板橋宿加助郷被 仰付候ニ付、右御用中人馬賃銀諸入用共、前書之通り一同立会内議定取極メ候」という「規定書」が世田谷領一四か村名主連印で作成された（六六項）。それによると、人足三二人（高百石に付人足二人当り）、馬二六疋（高百石に付一疋当り）、才料一三人（当組合二三か村役人、合計三五四人。人足一人賃銀五匁（二日懸り銀一〇匁ずつ）、馬一疋賃銀一五匁（二日懸り銀三〇匁ずつ）才料一人賃銀一〇匁（但一日二人立）、その他詳細な持参品等の記載がある）。

一一月三日には才領・人足・馬士の目印として、「才領之者目印背中江白木綿^{（ニ）}三角ぬい付、人足・馬士方右之袖江白木綿^{（ニ）}三角ぬい付」の雛形が廻達されている（六七項）。

これより数日前の一〇月二五日には関東御取締臨時出役五名、同定出役三名の連名で組合村大小惣代寄場役人中に宛、次のような嚴重取締の廻状が出された（六八項）。

今般 和宮様御下向ニ付而ハ、当節江江戸表 御着輿濟迄之間御道筋始其組合村々別^{（ニ）}御締向嚴重可相心得談御下知

ニ付左之通り申達し候

第一火之元入念無宿・惡もの又胡乱成もの不立廻様組合限申合、大小惣代・寄場役人・道案内人は不及申村々役人共不絶見廻り心付、急度御締相立候様可致候

一無宿・惡徒立廻り候節速ニ可差押は勿論ニ而、此余惣而疑敷相聞候ものハ不見遁、出所・来由尋不書頭子細有之者其所立留置、早々始末可申越候

一火盜之難其外何事によらず相替候義は譬浮説不取留義ニ而も、其時々速ニ申越、事実ハ追々聞取注進可致候

右之趣無違失相心得、此条都而御締行届候様精々無等閑可被申合候、自分共義此程ハ御道筋其外遠近も夫々廻在可致条、組合内無洩落申段置不都合無之様入念可被致候（以下略）

和宮下向の道中で、無宿・惡徒による不測の事態の發生に対し、幕府の威信をかけて嚴重警備体制を敷き、関東取締出役も臨時出役を設け増員を計っている。

一月七日には喜多見村・用賀村の二村名で、人馬増員について免除を出願したが許可されなかつた旨が次のように回達されている（七〇項）。

以飛脚得御意候、扱先日御相談申上候人馬之外百石拾八人増被仰付候二付、種々ニ御免願申上候所、何分御許容無之、依之御談判申上度奉存候間（以下略）

これまでは高百石につき人足一二二人の割当てが、この外に一八人の増員となり、結局高百石に三〇人という膨大な増員を命ぜられたのである。

こうしていよいよ下向前夜を迎え、一月二日夜六ツ時（午後六時）に上野毛村では人足四人・世話人一人が板橋宿に詰め、菊亭中納言はじめ六名の公卿等の「御通行御継立」に動員されたのであつた（七二項）。一日四当日にも

同規模で板橋宿に詰め「和宮様御下向ニ付右多人馬御繼立ニ相成候」となった(七三項)。一五日には「和宮様清水御屋敷江御着、其後嚴儀之 御行粧ニ而 御本丸^江可被為 入候」(七七項)として江戸城へ到着したのであった。この板橋宿加助郷人馬諸人用割合については、上野毛村は錢八貫八百貳拾六文の負担であつた(七五項)。又世田谷領村々の加助郷による相談等の費用内訳は文久二年「御用状留記」の九月一〇日の項に詳細に記載されているが(九七項)、それによると、錢一九貫文、此調錢一八貫二四〇文となり、高二千六三七石で割り、百石に付六九一文余となつてゐる。

(3) 生麦事件と世田谷領村々への波及

文久二年九月一四日、薩摩藩主島津久光ら一行は江戸から京都への帰途、神奈川付近の生麦村において、英人殺傷事件をおこした。すなわち、乗馬のイギリス人四名が島津らの行列を横切ろうとしたので、供先の藩士が無礼をはたらいたとして一人を斬殺し、ほか二名を負傷させた。

この生麦事件の少し前、五月には第二の東禅寺襲撃事件がおこり、英兵二名が殺された事件があり、イギリス公使ジョン・ニールは、幕府に謝罪と賠償金と犯人の即時処罰を強硬に要求してきた。これに対し、幕府は責任を回避して、英国側へ要領を得ない解答を繰り返すばかりであつた。ニールは、翌文久三年二月二九日、本国艦隊一二隻を横浜に回遊させ、その威圧で解決を急ごうとした。

この事態に対して、幕府も江戸市民もさきのペリーの米艦渡来以来の動揺を示し、いまにも戦争が始まらんばかりの大騒動となつた。

文久三年三月には井伊家世田谷領二〇か村では横浜から川崎迄の警衛として「世田谷御領分御百姓之内丈夫成もの」

六八〇人、駄馬七〇疋・駄馬口附七〇人、村役人一九人の出動態勢が命ぜられた（文久三年「御用状留記」二四項）。また警衛入用米として世田谷領二〇か村で、米貳百俵の貯蔵も命ぜられた（同二五項）。

さらに具体的な「議定之事」として、「今般神奈川表^五英艦渡来ニ付、非常御用之筋御賦方人馬大御用被 仰付候ニ付左之通り取極申候（以下略）」として、人足・人馬賃銭が詳細に規定された（同二六項）。

また、江戸の市民たちは江戸近郊の村々へ家財道具の疎開を開始し、世田谷地方にも続々と荷物が運びこまれた。文久三年三月二二日関東取締出役の指示を受けて、世田谷村組合寄場大小惣代役人より組合村々に対し、「今節市中に在方^五荷物相預候義ハ何町誰方^五何村誰方^五何荷何駄預り候趣、并妻子引越借家等いたし候族有之哉、小前末々迄取調可書上旨増山権助様^五御沙汰御座候間」として提出を求められ、上野毛村の預り覚が記載されている（同二九項）。それによると、葛籠・重簞笥・長持・風呂敷包等のほかに「娘壺人当亥九才」という預り人の場合もある。

文久三年三月二八日には、先述の横浜より川崎迄の警衛の郷夫の軽減を世田谷領二〇か村で出願した（同三二項）。それによると、郷夫として六八〇人の出動を命ぜられたが、三二〇人は「農事助合御領内非常手当」として必要であり、一五〇人は「世田谷駅・甲州道中上下高井戸宿助郷手当」として必要なので二口合計四七〇人は除外し、残り二一〇人と駄馬口附内七〇人と外に村役人一九人、合計二二九人にしてほしいと申し出ている。しかし認められず、五月五日には、代官所から「兼而申渡し置候急発御用郷夫人足六百八拾人・駄馬七拾疋、両様供此状着次第御留所^五可差出候、尤村役人・下世話人も附添村々々罷出御用大切ニ相勤候様入念世話方可致候」とあり、「追而銘々笠蓑持參可申付事」とある（同五八項）。しかし、結局五月八日桜田御前方より「応接之御模様ニ寄明朝出張之義ハ御見合ニ被仰出候ニ付、最早御指出ニ不及候間早々御指留可有之候」と中止となったのである（同六一項）。

これは、幕府が償金支払を決め、五月八日京都所司代小笠原図書頭長行が軍艦に乗って品川を出帆し、翌九日神奈

川に上陸して一〇万ポンドの償金を英公使に支払い、幕府とイギリスとの軍事衝突が回避されたからで、三か月にわたる騒ぎもようやくおさまったのである。

(4) 幕長戦争と井伊家の出陣

文久四年の「御用状留記」には幕長戦争と井伊家の動向が詳細に記載されている。以下簡単に紹介してみよう。

元治元年八月六日には世田谷村寄場大小惣代役人より、「御代官木村董平様御手附・御手代水野永太郎様・大沢賢介様御廻村之上、長防式ヶ国之義ニ付御取締向被 仰渡候義御達申候間、御村々御自身来ル十一日朝正五ツ時晴雨共寄場世田谷村名主宗八方^五御出会可被成候」という廻状が出されている(八一項)。

代官の手附・手代が組合村寄場を廻村し、幕長戦争に関する警備を村々名主に申渡している。これは、朝廷が長州征討の命を下し、幕府はこの命を受けて、彦根藩をはじめ西国二一藩に出兵を命じ八月將軍進発を布告、長州藩主毛利敬親・世子定広等の官位を剝奪した。征長総督には前尾張藩主徳川慶勝が任命され、広島に營所を置き、一一月一日までに諸藩は所定の場所に出陣し、総計一五万の軍勢が長州藩境を圍繞し、総攻撃を一一月一八日と定めた。

動員令の下っている彦根藩では臨戦体制をとり、九月二三日には代官所から「御進発御用武器類彦根表^五御差出し長持類持出し御用差支候間、壮年之もの指出し可申様御賄方御申来候ニ付」として、「是迄指出し置候人足拾五人差戻しニ相成候」と人足の入れ替えを命じているのである(九四項)

一〇月二九日には、「今般 御進発ニ付御用物継立を始御供役々多人数通行東海道品川宿継立人馬不足ニ付、同宿役人供々対談次第 御進発御用之継立ニ限相当之賃銭請取之、人馬無滞差出し御差支不相成様遂示談可取計もの也」という触書が、出雲・佐渡の御印で出された。これを受けて品川宿問屋兩名から、これまでの「宿并助郷村々計^二而

ハ御繼立人足引足不申候ニ付、道中御奉行様々其御村々^五雇人馬対談之義被仰付（以下略）。」とある（二〇〇項）が具體的人数は明示されていない。

しかし、この時の出兵は長州藩が謝罪恭順の意を示し、二月二七日、征長総督は参軍の諸藩に撤兵を命じた。ところが、慶応元年（一八六五）四月、幕府は長州に容易ならざる企ありとの理由をあげ、將軍進發を布達した。

元治二年の「御用状留記」の五月六日には井伊家が「御進發御先手」を志願したが、「御先代 直政公之御忠勤とも被思召」、「出格之御訳を以御跡々御越、御同勢出立以後大坂表迄御越可被遊段御書付を以被 仰出恐悦之御事ニ候」と記載され、先陣ではなく後陣となった（三二項）。五月七日には、「彦根 御宿泊城ニ付御先^五御出立御待請被為遊、夫々大坂表^五御跡々御越被為遊度旨御願之通被為蒙 仰恐悦至極之御事ニ候」とある（三四項）。

この第二次長州征討に際して全国の寺社からの冥加金上納方の触書が出されている（三七項）。

閏五月一五日には將軍が彦根城に到着し、一七日には出發しているが、直憲は病氣中であつた（四三項）。九月五日には直憲も病氣全快し京に入り（七三項）、同七日には大坂に到着した（七五項）。ついで將軍とともに上洛して二条城の警衛に当り、二四日には京都を出發し、翌二五日には大坂に戻つた（七六項）。一月には將軍上洛に供奉し、四日に京都を出て着坂した（九三項）。このように直憲は將軍の京都と大坂との往復に従事した。

一月一五日には、直憲は將軍に「御目見御懇之被為蒙 上意、其上御陣羽織御拝領被遊候段申來悦之御事ニ候」とある（一〇七項）。

一二月二日付の彦根表よりの「御飛脚到着」によると、井伊直憲は一月七日には長州征討の先鋒の仰せを蒙つたとある（二〇八項）。すなわち、「毛利大膳父子伏罪之義御疑惑之筋有之、右為御糺大小御目付芸州広嶋^五被遣、御糺之上模様奇惣御人数差向候間、御中軍御先鋒一之先之御心得を以、芸州廿日市^五御出張御差圖御待可被遊旨先月七日

被為蒙 仰候所、同廿一日於大手前 公方様行軍被為遊 上覧、右無滞相済益御機嫌克大坂表御出馬被遊候趣申来恐悦之御事二候」とある。將軍が征討軍の行軍を上覧し、井伊家軍団も大坂表を出馬したのである。

慶応二年の「御用状留記」の正月一九日の項に、直憲が前年慶応元年一二月七日に芸州広嶋に着陣し、広嶋誓願寺に本陣を構えたと言う彦根表よりの飛脚が到着している(四項)。

正月二六日には「殿様益御機嫌克被遊御超歳所々御陣所御別条無之旨申来恐悦之御事二候」という彦根表よりの飛脚が到着している(二三項)。五月一七日には、「去月廿七日広嶋誓願寺 御発足廿日市江被遊 御出張、木俣土佐・戸塚左太夫両隊珍波近江操込相成候段申来候」という飛脚便が到着した(六一項)。

六月五日には毛利大膳父子に対する裁許申渡書が触れられている(六二項)。それによると、「高之内拾万石被 召上、大膳ハ蟄居隠居、長門は永蟄居 被仰付、家督として奥丸江式拾六万九千四百拾壹石被下候」というものであった。幕府は老中小笠原長行をもって処分内容を伝え、請書提出の期限を五月二九日とし、これのない場合は六月五日をもって総攻撃を行うことを示した。しかし、すでに慶応二年正月二日に薩長連合を締結していた長州藩は請書を提出しなかった。ついに六月七日幕府軍艦が大島を砲撃、ついで芸州口・石州口・小倉口に征長軍と長州軍との交戦が始まった。折から、兵庫・大坂・江戸に打ちこわしが、武州をはじめ各地に農民の「世直し一揆」が発生して幕府統治は動揺をふかめ、長州再征への反対論は強まり、薩摩・安芸の両藩は出兵を拒絶した。戦局は、士気にまさり、洋式の兵器で装備された長州軍の優勢のうちに進出した。七月二〇日には一四代將軍徳川家茂が病没し、幕府は將軍の喪を発し休戦し、九月一九日、幕府は征長軍に撤兵を命じ、幕府の軍事的威信は凋落したのである。

この間の事情が、慶応二年の「御用状留記」には逐一克明に記載されているのである。内容が重複する嫌いがあるが簡単にたどることとしよう。

慶応二年六月一四日の代官所の廻状では、「来ル廿九日^(五月)期限ニ至リ請書不差出節、問罪之師被差向候間、弥来月五日諸手一同討入候様可被致候」「右之通り口々討手之面々^江相違候間（以下略）」と緊迫した情況をを伝えている（六四項）。

六月二三日の代官所よりの廻状によると、問罪師派遣の触書が示され、その中では、「右期限ニ至リ御請書不差出候（中略）、天幕之命を遵奉不致 御裁許違背不届至極ニ付、問罪之師被差向候間此旨可被相心得候」とある（六八項）。六月には幕府大目附からの触書として、「今般長防御征伐ニ付芸州表^江軍勢出張、米穀諸色共払底之趣ニ相聞候間、土地百余之品共可相成、彼地積送り商人共^江相対候様売渡候様可致候」として、中国・四国・西国・北国筋に申渡している（七五項）。

六月一〇日の彦根表よりの飛脚到着によると、「殿様益御機嫌克可被遊御在陣、（中略）岩国搦手口御当家、柳原式部太輔様御両手持、猶又高森筋関戸街道之押江をも嚴重御心得可被遊、尤臨機之進退救応之義ハ時宣次第被仰合候様御達在之段申来候」とある（七六項）。七月二日には長防討入につき留守の者の心得方触書が出され、「弥長防^江討入ニ相成候ニ付而ハ何方^江変事出来可致も難計候得共、兼而御触示しも有之通一同慎肅ニ被罷在油断無之様可被心得候、勿論何時如何様之御用可被仰付も難計候へハ、無息又ハ隱居之衆たり共遠方^江罷越不申様可被致旨彦根表ニ而御達有之間 其旨被相心得」と申し渡されている（七七項）。

戦局は前述の如く幕府軍に不利となり、七月に入ると、ついに世田谷領分の銃隊組（農兵）や郷夫五六拾人の動員令が出されてきた。

七月一八日の代官所の廻状によると、「長防一件ニ付定夫銃隊組并千田谷直徹^(銃)流隊仕度出来次第、彦根表迄被差遣候ニ付、御領分郷夫五六拾人程用意致置候様奉行中^ハ被申越候間相違候、其旨相心得達し次第無差閥郷夫出候様仕度

可被置候」とある（七九項）。これに対し井伊家世田谷領二〇か村では、農業繁多の折柄郷夫は一〇人程とし、そのかわり眞加金一〇〇両を上納したいと願ひ出たが、願書は代官所から佐野奉行兼帶御元方へ提出されたが差戻されてしまった（八一項）。しかし実際には戦局の変化により出動しなかつたようである。

八月二六日の項には將軍家茂の病死が次のように記されている（九七項）。

七月

大目附正

公方様去ル廿日卯上刻於大坂表 薨御二付今日る普請・鳴物停止二候

八月二六日

ついで八月二九日には、「兼而被 仰出候通り一ツ橋中納言様御相続被遊、去ル廿日る上様奉称旨被仰出候」とあり、徳川慶喜が一五代將軍に就任したのである（九九項）。

九月八日の達書には、直憲が長期にわたり滞陣した功により老中水野出羽守の書付をもつて「御米五百俵御頂戴」したとある（二〇三項）。

九月一五日には、「大樹薨去上下哀傷之程も 御察被遊候二付、暫時兵事見合候様可致旨 御沙汰二候、就而は是迄長防二隣境侵掠之地品々引払鎮罷在候様可取計候事」として兵の引払方の触書が出されているのである（二二項）。直憲も、京都に於て九月二日老中板倉伊賀守より「殿様永々御出張御大儀二被 思召、依之一ト先彦根表_正御休息之御暇被下置」、こうして九月二六日に彦根に帰城した（二一四項）。

慶応二年二月三日老中板倉伊賀守よりの触書により、天皇の命により「長防討手暫時兵事見合相成候様此度御国表二付一同解兵可致旨被 仰出候間、可被得其意候」とあり（慶応三年「御用状留記」八項）、幕長戦争は終結したのである。

(三) 幕末期の治安動揺

(1) 浪人・無宿の横行

幕末期の政情不安とともに浪人・無宿の横行による治安体制の悪化は人々に多くの動揺を与えた。領主側としても支配の再編強化を図らなければならなかった。

万延二年の「御用状留記」の二月四日には大目付から関八州の大名・関東取締出役に宛た浪人・無宿取締りの触書が廻達された(四項・五項)。

此頃近在所々浪人又ハ無宿鉢のものの共徘徊致し、無心ケ間敷事共申懸及不法候ものも有之哉二相聞、不届之事二候、向後右鉢之者共立廻り候ハ、聊無用捨捕押置早々可被申聞候、尤手ニ余リ候義も候ハ、打捨候^(殺力)とも不苦時宜ニ寄鉄炮等相用候^面も不苦候間、隣領之面々江も申合置、其次第二寄候^面ハ相互ニ加勢差出候様可被致候、(中略)

右之趣関八州御領・私領・寺社領共不洩様可被相触候

この触書は、大目付から各大名へ、大名領の代官から各村へ伝達されると同時に、関東取締出役から各組合村寄場大小惣代へ、大小惣代から各村へ伝達されるという重複がみられ、それ故、「御用状留記」には同一内容のものが、二通り記載されている。

文久元年(万延二年二月二九日改元)六月五日の関東取締出役から組合村寄場大小惣代役人宛で東禅寺を襲撃し外国公使館員を負傷させた犯人の捜査の次のような廻状が出された(二八項)。

去月廿八日夜高輪東禅寺外国人旅館江浪人鉢之もの共押込及乱妨、右之内自殺・生捕残逃去候もの有之当時探索中

二付、若右浪人舩怪敷見受候もの立廻候ハ、内藤新宿御用先^江即刻届出可申候

六月には逃亡人七名の氏名が触れられた(三〇項)

これは、第一次東禅寺事件といわれるもので、イギリス公使オールコックの東海道旅行に憤激した水戸浪士ら一四人が仮公使館の江戸高輪東禅寺を襲撃し公使館員二人を負傷させ、賠償金一万ドルと幕府の経費で適当な地に各国公使館を建設することで解決した。

文久二年六月には第二次東禅寺事件が発生した。これは松本藩士伊藤軍兵衛がイギリス仮公使館東禅寺警備のための自藩の出費を憂え東禅寺を襲い、イギリス水兵二人を殺し自殺した。幕府は解決金として一万ポンドを支払った。文久二年の「御用状留記」の六月朔日には関東取締出役より世田谷村組合寄場役人に対し、「昨夜高輪東禅寺異人館^江乱妨人立入候趣二付、精々心付怪敷もの立廻り候ハ、致跡付落付場所聡と突留早々可被致注進候、若及乱妨候ハ、捕押其段急速可被申聞候」とある(五八項)。

これ以後治安問題は外国人殺傷事件から脱藩浪士らの反幕府運動に移行するのであった。

さて、文久元年七月一三日には関東取締出役より世田谷村組合寄場役人宛に「昨十二日夜四ツ半時頃麻布善福寺^江拔身を携多人数押込及乱妨逃去り候間、其村々并組合村々^江可立廻も難計二付、怪敷見聞候ハ、内藤新宿御用先^江即刻届出可申候」と廻達されている(万延二年「御用状留記」三五項)。

文久元年八月三日には関東取締臨時出役より「人別外胡乱之もの等嚴重取調」が組合村ごとに実施するよう触書が出されている(同四一項)。これは和宮下向の決定とともに関東取締臨時出役が設置され、村ごとの「人改め」を行い治安強化を図ったのである。

文久元年一〇月には、「市中料理茶や等二^面若き女を抱置、身形を粧ひ客之給仕又ハ酒之相手ニ差出不取締之儀も

有之哉二相聞、不埒之事二候、向後料理茶や共働一ト通りニ抱置水仕女之外、衣類・髪飾等粧ひ候女子共召抱置、客之給仕杯ニ差出候義堅不相成候、近在・市中御趣意同様可相心得旨当三月中被仰渡有之所、猶又不相弛様嚴重取締可致」との触書が寄場世田谷村に廻達されている（五九項）。これは接客用の女性を禁止し風俗統制を引きしめているのである。

一〇月三日には関東取締出役より、江戸周辺の中野・下北沢・世田谷の各組合村の寄場役人に対し「紀州天野数馬と申もの、去月廿三日奥州道中須賀川宿より両掛壹荷繼立江戸表江罷越し候積先触差出候へ共、いまた不能越途中より脇往還江這入候哉も難計二付、精々心付立廻り候ハ、召捕可差出旨其筋々御沙汰二付、得其意組合村々江も申通、自然立廻り候ハ、差押内藤新宿御用先江早々可申出候」とある（同六〇項）。

文久元年二月二七日には上野毛村名主七左衛門から世田谷領代官所に盗難届が出されている（同八五項）。それによると同村留五郎居宅へ盗賊が忍入、餅白米六斗余、黍一斗八升程を盗みとられたというものである。食糧が何よりも貴重であったことがわかる。

文久二年の「御用状留記」の正月一六日の項には関東取締出役より「昨十五日安藤対馬守殿 御登場掛ケ乱妨人有之哉風聞二付、自然怪敷者立廻り候ハ、差押置、早々内藤新宿御用先江急速最寄訳を以可被相達候」と水戸浪士らによる老中安藤信正の襲撃事件が触れられている（二一項）。これは信正が公武合体論を推進し、和宮降嫁を実現させたことが尊攘派の憤激を招き信正暗殺が企てられたが未遂に終わり、以後公武合体運動にかわって尊攘運動が盛んになった。世に「坂下門の變」とよばれているものである。

三月一日には関東取締臨時出役より清川八郎の人相書が廻達され、召捕の指示が出されている（二六項）。なお、五月九日にも、清川八郎・厚美五郎・前田与三郎らの人相書が出されている（五〇項）。清川八郎は幕末尊攘派志士で

文久二年挙兵をはかるが挫折し、江戸において浪士組を組織したりして幕府に追われていた。このほか、さまざまな人相書・手配書が廻達されているが、ここでは省略する。

文久三年の「御用状留記」の二月七日には、將軍上洛につき関東取締組合へ取締強化の法令が次のように出された（二〇項・一三項）。

今般 御上洛御留主中関東在々御取締向之義、左之通り申渡し候

一組合村々之義無宿・悪党共又ハ胡乱成もの不立廻様、組合限り大小惣代・寄場役人・村々役人・道案内人共不絶見廻り、都而取締之儀無之様精々心付、火之元別而入念可申候（以下略）

これは、將軍徳川家茂が上洛し、三月一九日攘夷の勅を受け、攘夷期限を五月一〇日と上奏し、その旨諸大名へも伝達した（『徳川禁令考 前集第二四九〇号』）。ここに對外戦争の危機は一挙に高まり、幕府は開港以来の最大の窮地に立たされたのであった。この時、幕府がもつとも恐れたのは、對外戦争もさることながら、この危機に連動して国内に反権力的な民衆蜂起や無宿・悪党らが猖獗をきわめ、内乱状態となり、幕藩国家体制が内側から崩壊してしまう可能性のあることである。こうした切迫した危機感が農村支配の強化政策をとらしめたといえる。

幕府は文久三年二月將軍家茂上洛につき留守中の関東農村の取締りとして、「無宿・悪党共又ハ胡乱成もの」が立ち廻らないよう「組合限り大小惣代・寄場役人・村々役人・道案内共」の廻村取締強化を指令したのである。

また幕府は文久二年に浪人を徴集し、江戸における海防および非常の警衛にあてた警備隊を組織し、新徴組と称した。新徴組は鶴岡藩に属し、幕府滅亡まで尊攘・倒幕運動を弾圧した。しかし、浪人等の中には新徴組の名を騙って悪業を重ねる者がいた。そこで、幕府は文久三年六月、正式の新徴組には「印鑑」を所持させ、一種の身分証明書を発行し、宿村では、これによって真偽を判定させるようにしたのである。

六月二六日関東取締出役より次のような触書が世田谷村組合寄場に廻達された（八一項）。

此程悪党共新徴組之趣ニ申成宿村等^江罷越、無代^而酒食いたし又ハ人足等為差出候もの有之真偽紛敷趣ニ付、以来新徴組之もの旅行致候節ハ御用筋^二而何国筋^江被差遣候趣之印紙、私用^二而何国筋^江参り候趣之印紙持参^二而旅行致、御用之外ハ旅籠代并人足賃錢等宿村ニ相對を以相払候筈ニ付、別紙印鑑^江持付、相渡候間、宿場宿村々^江差置紛敷相見^江候も有之ハ、右印鑑引合相改無印鑑之ものハ勿論相違之印鑑所持致候者ハ速ニ擲取、最寄廻村之当出役^江訴出候様可致候（以下略）

十一月朔日にも関東取締出役より「当節浪士鉢之もの所々立廻り候ニ付、御村々之内酒食商ひ・茶屋・旅籠屋渡世之もの共^江右之趣申渡請印取置可被成候、若右鉢之もの見請候ハ、其所^江留置早々寄場大小惣代中^江注進可被成候」との廻状が出されている（一一九項）。

一二月二日には野良田村粕谷与一右衛門より、等々力村からの注進として「当村・用賀村境野山ニ浪士鉢之者七八人相見^江候趣右村^江申来候間、自然其御村々^江立廻り候も難計候間、御村内御用心御申付可被成候」とあり（一二六項）、当時浪士らが徘徊していたことが判明する。

ほぼ同じ頃、江戸でも嚴重取締りが幕府から触れられている（一二七項）。

覚

当今浮浪之徒御府内徘徊致し不穩所業も有之哉ニ付、御取締筋猶一段嚴重相成候様可致、依^而は市中廻り方之儀も別^而勉勵致し怪敷もの・乱妨人等見当り候ハ、聊無用捨召捕可指出、尤手余候節ハ切捨不苦候趣廻り方之もの^江相達し候間、其心得を以家来末々ニ至迄心得違之所業無之様主人々々より厚可被申付置候
右之通り万石以上以下之面々^江不洩様可相達候事

一二月一〇日夜五ツ時（午後八時）には武州多摩郡能ヶ谷村百姓安之丞宅へ二人の押込み強盜が入り「兩人共長脇差を引抜き金子差支ニ付金子可差出、声立候ハ、可切殺旨申威候ニ付、右安之丞女房恐縮致部屋戸棚ニ入置候金子」合計五三兩を差し出し強奪された様子と人相書が廻達されている（一三四項）。

將軍徳川家茂は再度上洛し、文久四年一月一五日京都に入つた。これは横浜を鎖港し開港による影響を最小限に食い止めようとする幕府の方針を朝廷に示し、反幕勢力を弱めようとする政策からであつた。

この上洛を機会に幕府は、一二月一五日より各関所および江戸出口宿々の番所警戒をいちだんと強化した（文久四年「御用状留記」五項）。

今度 御上洛被 仰出候ニ付^而は、御留守中御取締向一際嚴重可致、就^而ハ来ル十五日^ヲ諸国御関所并江戸出口・宿々番所等ニおゐて出入相改、主人并領主・地頭之書付持参不致ものハ不通筈ニ候間、万石以上之面々は勿論以下^ニ而も陣屋有之時々家来往来為致候面々ハ、兼^而印鑑道筋御関所等^江相廻し置、家来往来度々月日人数等委細ニ認候調印之書付可被相渡候、若脇・閑道相越^{（マダ）}又ハ押^而相通候ハ、召捕、手向致候へハ切捨ニ致し候筈ニ候（以下略）

これにより交通規制を嚴重にして浪士・無宿の横行を阻止しようとしたのであつた。

また江戸周辺の村々で日々江戸との交流をもっている百姓には鑑札を交付し、鑑札のないものは江戸府内には入れないという方針をとつた（同一一項）。

先達^而被 仰出候 御上洛 御留守中関所々々人通之義、近在之渡世筋^ニ而日々御府内^江出入致候百姓・町人并人足稼之もの共ハ勿論、遠国関所々々^ニ而も土地往来之分ハ老人別町所・名前認候所役人連印之鑑札渡置、右を以無間相通可申（以下略）

さて、文久四年の「御用状留記」には、同年二月二四日夜四ツ時（午後一〇時）頃に武州多摩郡大蔵村百姓覚之助

宅へ「剛盜三人手拭^二面^一」を包抜刃を携押込、右覺之助并彦郎兩人細帶^二而^一搦置所持之金錢可差出、若声立候ハ、可切殺申威及異儀可申哉も難計、打驚金錢有合不申衣類左之通（以下略）」として七品を奪取られたことを世田谷村組合寄場役人から関東取締出役に届出ている（二六項）。

翌二月二五日暮六ツ時（午後六時）頃、武州荏原郡用賀村百姓馬之助宅へ「剛盜三人面鉢を包式人抜刃を携外売人無腰之様子押込、家内之もの共藁繩^二而^一搦置往来路用ニ差支候間所持之金錢貸呉候様、声立候ハ、可切殺旨申旬候ニ付、打驚何品^二而^一も勝手ニさがし持参候様申之候（以下略）」として金ニ兩余と錢二貫八〇〇文等一一品を奪取されたことを前記同様二届出ている（二六項）。

さらに元治元年（文久四年三月二日改元）四月一九日には用賀村油屋寅松方へ昼八ツ時（午後二時）過「新徴組之由申之、士体式人立越金子千五百兩借用致度旨折節金子不有合趣相答候所、可及刃傷体打驚家内一同逃隠残り居候召抱佐十郎と申すもの江重過可相越無心可申入候間、主人江通候様断置退参いたし候段申出候ニ付、其御筋江御届奉申上候（以下略）」とあり（五三項・五八項）、「新徴組」と称して金錢の強奪をねらっているのである。先述のように「新徴組」の真偽を区別するために正式の「新徴組」には印鑑を持参させるとしたが、このような状態ではあまり効果は期待できなかつたのではなからうか。

（2）佐野騒動——天狗党の乱

文久年間には尊攘運動が全国的に高まり、西日本では長州藩の活躍が目覚ましく、東日本では水戸藩尊攘派が中核となった。幕府はこれらの尊攘派を押え公武合体による対外和親政策をとった。水戸藩尊攘派は事態を打開するために、ついに筑波山挙兵を企図した。いわゆる天狗党の乱である。水戸藩士藤田小四郎（東湖の子）らは、幕府が朝廷より

攘夷の命令を受けながら行動を起こさないことに憤慨し、元治元年（一八六四）三月に筑波山に拠つて挙兵した。これによつて天下の攘夷派の志士を結集して攘夷を断行しようとした。四月には筑波山を出発し日光東照宮に詣で、ついで太平山を拠点とした。その数三〇〇人余といわれている。⁽²⁾

このような動靜に対して、野州佐野に領地を持つ井伊家では藩兵や世田谷領農民を動員して鎮圧を企図した。文久四年の「御用状留記」の四月二〇日には、代官所の廻状で世田谷領から鉄砲指南木村六兵衛の西洋組を差添え、七九人の農民を送り込む予定の指令を出している（五〇項）。

覚

高七拾九人

一貳人

右ハ今此佐野御領分近辺騒々敷ニ付、木村六兵衛西洋組差添今一応御沙汰次第被指越候ニ付夫々割賦之通り郷夫申付置今一応相達候ハ、即刻東御台所^江差出し可申、勿論佐野表迄送込計之御用ニ有之間其旨心得可申渡候（以下中略）

四月廿日

御代官所印

六月三日には、代官所より「野州大平山其外害ヶ所^江浪士之義ニ付御手当方 公辺方御触面有之ニ付、世田谷村^江御物頭并組下之もの等御人数出張ニ相成候間件之人足今三日夕東台所^江差出し可申」として、「右人足拾六人世田谷・弦巻・用賀・新町四ヶ所^江被仰付候」とある（六一項）。

これより少し前の五月二七日には関東取締出役より「浮浪之徒取締ニ付^而ハ追々相触候趣も有之所、先達^而以来野州大平山・常州築波等ニ多人数集屯罷在所々横行致、右ハ水戸殿御家来并御領分之もの共重^{ニ而}既^ニ贈大納言殿之遺志^(筑)

を継候^ニ申唱候由^ニ相聞難捨置筋^ニ候へ共、水戸殿^ニおめて御手限^ニ御取鎮被成度趣被仰立有之候間、御任セ被置候所追々増長、此程^ニ至候^{而ハ}右場所^{而ハ}已^ニも不罷在異形之体致式^ニ三拾人位宛群り歩行、中^ニハ無宿・悪党ものも相加里金銭押借いたし百姓供難儀不少、依之太平山・築波等^ニ罷在候もの共速^ニ水戸殿御領内^江引取候様可相成、其余異形之体^ニ徘徊致軍用金^ニ扨^而金子為差出候類^ハ勿論之義、(中略)浪人体^ニ怪敷見請候分^ハ仮令水戸殿御名目相唱候^而も召捕、手向等いたし候類^ハ切殺候とも可致旨嚴重相触候段水戸殿^江相達置候間、右之趣相心得銘々領分・知行限家来差出時々為見廻、万一不法もの等有之候ハ、搦捕又ハ討取、多人數之節隣領申合、尤手余候ハ、是又打殺候とも不苦」とあり、「右之趣関東八州并越後国・信濃国領分・知行有之面々^江不洩様可被相触候」(六三項)と関八州以外に越後・信濃の両国もその対象に入っていることが注目される。ここでいう「異形之体」とは「いづれもうしろ鉢巻をし、陣羽織の美々しい支度」⁽³⁾とある。

六月八日には代官所から上野毛村に對し、五人を「野州佐野表^江明後十日御人數御指出御用^ニ付、明九日夕迄^ニ御上屋敷東御台所^江件之人馬可差出」とある(六四項)。さらに六月九日には一人の動員令がでてゐる(六三項)が同一〇日には「最早差出^ニ不及候」という通達が出されている(六八項)。

八月には関東取締出役より組合村寄場役人に對し、「築波山集屯之賊徒共悉御誅伐可有之旨筋^江御達^ニ付、村々ニおゐても其旨相心得賊徒共金銀押借等^ニ罷越は勿論之義、潜伏又ハ徘徊いたし候ハ、竹籜其外得物を以無^ニ無^ニ三打殺可申候(以下略)」とあり全員誅伐、皆殺しの対象となつてゐる(八九項)。

九月一七日には、関東取締出役より「常州築波山等^ニ集屯暴行致候浪士共追討御人數御差向^ニ相成所、浪士共散走致候由^ニ相聞候、乍去兼^而相触候趣も有之難逃延義^ニ候得共、自然姿を替落行候ものも可有之候間、聊^而も怪敷鉢^ニ見請候ハ、無用捨召捕可申候、尤手向等致候ハ、切捨候様可被致候(中略)、右之通関八州・陸奥国領分・知行有

之面々^互不洩様可被相触候」と廻達されている（九三項）。

天狗党は出兵した幕府軍に敗れ、西上して京都におもむき、自分達の考えを朝廷に訴えようとした。西上した天狗党は諸藩と戦闘したのち、加賀藩に降伏し、武田耕雲斎、藤田小四郎ら三七〇余名は幕府によって処刑され、さらに、耕雲斎の妻や一〇歳と三歳の子まで死罪という徹底的な処刑によって天狗党の乱は終わったのである。⁽⁴⁾

(四) 関東取締体制の強化

(1) 組合村の武装化指令

文久三年（一八六三）は、幕府が朝廷から攘夷の勅を受け、攘夷期限を五月一〇日に設定するなど、対外戦争の危機は一挙に高まり、幕府は開港以来の最大の窮地に立たされた。

結局、幕府の攘夷は決行されなかったが、かえて、攘夷運動は激化し、幕府は支配体制の強化で対応しようとした。文久三年の「御用状留記」の七月一二日には世田谷村組合寄場役人から組合村々へ村方三役の召集の廻状が次のように出されている（八六項）。

以廻状御達申候、然ハ去ル三日御取締御勘定方山中誠一郎様并御出役安原憲作様・杉本麟次郎様御廻村之上、御締向被 仰渡候義御達申候間、御村々三御役人銘々印形御持参、来ル十八日朝正八ツ時不遅様世田谷村万屋幸右衛門方^江御出会可被成候（以下略）

この山中誠一郎等三人が一組となつて、「別段御取締り被仰付」たとして関東全域の組合村寄場を巡回し、寄場役人・大小惣代・村方三役人を招集し、「口達」を行い、それを書取らせて組合村々に廻達させているのである。その

「御口達写」は上野毛村田中家文書の中に存在しているが、⁽⁵⁾簡単にその内容を紹介すると次のとおりである。

①「文政度御改革此度新規被仰出候心得を以」大小惣代・村役人は取締りにあたること。

②「夷船渡来ニ付^而ハ、何時可開兵端哉も難計、御国^ニ而ハ容易ニ御打払有之間敷（中略）若戦争之場ニ至候ハ、動揺可致哉、右等々小前之もの共無体ニ心配致し行末無覚束、農事稼之張合無之坏と銘々力ヲ落、家業惰候^而ハ以之外之儀、無斯様村役人共精勤を尽、兎角人氣不驕立様、其節ハ能々可申論事」として対外危機と国内動乱との連動を恐れている。

③「弥御戦争ニ成行、自然動揺之余り、無宿・悪徒共溢押込夜盜等可致、左候節ハ村々番屋相補理、兼而鳶・竹鎗等拵置、党を結び候節ハ、盤木・太鼓等打鳴、其場所夫々得物を携馳付捕押、手ニ余り候ハ、時宜寄打果候共不苦、其上当出役共^江可申出」とあり、対外戦争中の国内の動乱に備え、組合村の武裝化を命じている。

④「前辺動揺之折柄、市中之もの立退可相越哉ニ候得共、兎角穀屋共人氣を計ひ私欲ニ誇、自然ニメ売買致、困窮もの之難儀をも不顧、以之外之義」として、これが「人氣不穩」の原因であるから「召捕」ることを命じ、寄場役人らは「身元相應之もの共」が貧民に「助成」するよう教諭せよとしている。

⑤「村々ニおゐて不宜所業仕成もの有之候ハ、村役人・惣代共々常々自得いたし候様実愛を以^(意)異見」を加えることを命じ、日常の教諭活動を奨励している。

⑥組合村の大小惣代役人や道案内の増員ならびに道案内には惣代役人の代行ができほどのものを選任するよう命じている。

以上の六項目は結局、対外戦争の危機に直面し、領主側の戦力が対外戦の防備にふり向けられ、本来の階級的暴力装置としての戦力の空隙を満たすために、幕府は組合村ごとに武裝編成し、国内治安の一部を担当させたのである。

それと同時に国内における「世直し情況」に対しては豪農層の「世直し」層に対する救済活動を奨励しているのである。⁶⁾

(2) 兵糧方下役と組合村の武裝化

文久三年九月、江戸周辺一〇里四方に設けられていた將軍家御鷹場を管理する御鷹野役所は改組されて兵糧方役所となり、鷹場組合の触次名主など有力村役人は兵糧方御掛り下役に任命された。

九月二十九日には兵糧方御役所より「申渡候御用之儀有之間、明後二日朝四ツ時刻限不遅様可罷出候」として、左記の一二名に宛たものである(一二二項)。

第2表 世田谷領兵糧方下役

村 名	役 名	名 前
上野毛村	名主	七左衛門
下北沢村	触次	土太郎
下北沢村	百姓	喜左衛門
松原村	名主	沖右衛門
下沼部村	名主	兵左衛門
覚東村	名主	孫 七
烏山村	名主	万 七
下祖師ヶ谷村	年役	平右衛門
下北沢村	年役	平 藏
駒井村	名主	平左衛門
太子堂村	名主	忠左衛門
深沢村	名主	伴 藏

これにより先の八月二日は御鷹野役所より村々触次に宛に「兵糧焚出方御用ニ付、以後差紙等遣し候節兵糧方御役所と認候条、得其意村名下江下ケ札を以承知之旨令請印早々順達留り村々可相返もの也」と廻達されている(一二六項)。

兵糧方下役らは出勤中は帯刀・陣笠・野袴・半纏等を着用し、非常人足の動員などの指揮を担当したのであり、いわば村落上層部の触次・名主・年寄の有力なものを軍事的に編成したものである。

一月一六日には下北沢村触次土太郎からの書状で、「兵糧方下役一条之義先達馬込領江問合申入置候所、同領も

隣領^江打合之上別紙之通り書面を以被申越候ニ付、小袴[□]一同揃にいたし候^而ハ如何、(中略)依^而は右品類拵方揃
ニいたし置可然哉ニ奉存候(以下略)として、兵糧方下役の着類拵方につき小袴を一同揃えにしようという意見であ
る(一二三項)。

一月二六日には「非常兵糧方御用被仰付候義ニ付、得と御相談申上度義御座候」として集会の案内状が記載され
ている(一二五項)。

一月二〇日には世田谷村組合寄場役人より各村名主に宛て「関東御取締御出役内山左一郎様を当組合村々^江被仰
渡候義有之ニ付、明朝正五ツ時御旅宿寄場世田谷村^江罷出候様相達可申旨被仰付候間、則御達候」とあるが(一二四
項)、この時の内山左一郎の伝達内容は下北沢村組合の太子堂村の森家文書に残っている。⁽¹⁾

組合議事之事

一、今般関東御取締御出役様を非常手当之儀被仰渡之趣、一同難有承伏、組合申合左之通り

一、組合村町一村毎ニ小前銘々竹鎗等用意、五人組之内其最寄限凡拾人位ツ、組合分ち差定置、悪党共立廻り候節は
聞込次第急速罷出、御趣意之趣相弁、村役人重立候者差図請、搦押方精々可仕候事

但、龜忽之儀無之様、銘々村役人頭取候者之差図を請、且兼^而被仰渡之趣厚相心得、互ニ実意^ニ取計事

一、組合村町之内壯健之者相撰、非常人数相定、目印并手鎗・もちり銘々^江相渡置、何方成共合図次第罷出、村役人
并寄場役人大小惣代之差図請、精出し前同様捕方可仕事

(中略)

文久三亥歳十二月

これによると組合村傘下の各村小前百姓はそれぞれ竹鎗・もじり(袖摺のこと)などで武装し、五人組を基礎に一

○人単位となつて村役人の指揮下に属したのである。

ほぼ同じ頃、文久三年一〇月には上州「岩鼻村陣屋非常農兵取建」が行われ、同年十一月には幕府の江川太郎左衛門代官支配所でも農兵制が施行されるのである。⁽⁸⁾

つぎに井伊家世田谷領における農兵制度について「御用留」の記載から窺つてみよう。

(3) 井伊家世田谷領の砲術稽古

井伊家世田谷領では幕府直轄領の農兵設置や銃隊稽古の進行に刺激され、村役人や富農層（永上人）を中心に砲術稽古を開始したのある。

元治二年の「御用状留記」（元治二年四月二〇日に慶応元年と改元）の七月二八日には井伊家の西村又次郎から世田谷代官大場与一宛の書付で「御領分中帯刀 御免之もの共砲術師範相願置候処、今日木村六郎兵衛^江被 仰付候旨、御目付衆^五被相達候間相達候、其旨御心得御申渡可有之候（以下略）」として砲術師範として木村六郎兵衛にきまつたことが知らされている（五〇項）。

八月六日には代官所から、「以書付申達し候、御領分帯刀 御免之もの共砲術稽古之儀日限相定木村六郎兵衛世田谷^江出張致し候間、右二付申談義有之間、尤兼^而三ヶ村惣代を以申通置候村々役人共井永上人、不残来ル九日朝正四ツ時上町^江相揃可申候、無滞早々順達留村^五可返候、以上」とある（五一項）。

こうして八月二日から銃砲の稽古が開始されたのであったが、「練兵館高嶋流砲術稽古出席名前帳」によれば、⁽⁹⁾
彦根藩御屋舗より砲術師範として、木村以下一名が世田谷村角場へ出張し、領内二〇か村の名主・年寄・永上人など四六名が毎月二・七の日（月六回）に鉄砲調練を受けることになったのである。この四六名を表示すると第3表の

第3表 慶応元年8月彦根藩世田谷領砲術稽古人の構成

村名	身分	氏名	扶持	献金額	備考
上野毛 (3人)	名主	田中七左衛門	6人	300両	嘉永5年より永上人帯刀御免・ 一本紙名主(安政5)
	年寄	要次郎倅、田中稻五郎 十右衛門倅、田中刀五郎	2	100	
			2	100	
用賀 (6人)	名主	飯田麻次郎	2	100	文政10年より永上人横浜商人 文政10年より永上人 文政10年より永上人 文政10年より永上人(油紋、万商)
	年寄	鈴木六之助	12	600	
	年寄	飯田武七	11	550	
	年寄	高橋五郎右衛門	2	100	
		与四郎孫、飯田文蔵 寅松倅、鈴木松次郎	6 3	300 150	
弦巻 (4人)	名主	安太郎倅、鈴木佐太郎	6	300	農間米穀・醤油造渡世
	年寄	徳次郎倅、富田治郎	2	100	
		鈴木猪左衛門	2	100	
		造酒之助倅、鈴木瀬助	2	100	
野良田 (5人)	名主	与一右衛門倅、粕谷和三郎	2	100	文政10年より永上人 油紋り稼
	年寄	粕谷市右衛門	2	100	
		白井権蔵	2	100	
		木村長平	2	100	
		粕谷庄五郎	2	100	
世田谷 (5人)	名主	松本宗八	2	100	文政10年より永上人 荒物・質屋渡世
	年寄	武川久次郎	2	100	
	年寄	新兵衛倅、芹沢銀蔵	2	100	
		政右衛門倅、稲山丑五郎	2	100	
		久右衛門倅、細野喜兵衛	2	100	
瀬田	名主	長崎英次郎	6	300	文政10年より永上人
八幡山	名主	嶋田権蔵	2	100	
岩戸 (2人)	名主	須田金蔵	2	100	
	年寄	源兵衛倅、三角啓蔵	4	200	
猪方 (4人)	年寄	小川文平	—		
	年寄	小川金三郎	—		
		十左衛門養子、小川十八	4	200	
		栗原八十八	2	100	
下野毛	年寄	原永次郎	2	100	
宇奈根 (2人)	年寄	亥三郎倅、香取斧三郎	2	100	
		小泉六之助	2	100	

大 蔵 (2人)	名主	六左衛門倅、安藤兵五郎 藤八倅、石居猶右衛門	— 2	100	
岡 本 (2人)	年寄	次右衛門倅、芦田初五郎 長蔵倅、榎本石五郎	— 2	100	文政10年より永上人
新 町	名主	新右衛門孫、石田槌之助	—		
和 泉 (2人)	名主 年寄	石居太三郎 石居作平	— —		
横 根 太子堂 鎌 田 馬引沢 小 山	名主 名主 年寄 年寄 名主	清水長兵衛 榎本熊次郎 橋本藤右衛門 九蔵代、小林利三郎 専蔵倅、原田弥八	— — — — —		
合 計	46人	(永上人) 名 主 14 (8) 年 寄 17 (11) 百 姓 15 (15)	108人 扶持	5400	

(注)『世田谷区史料』第3集331～336頁、その他より作成。

とおりである。これによって砲術稽古人の構成が村役人と「永上人」によっていることが明瞭となり、ここに砲術稽古人の階級的性格が端的に示されているのである。すなわち、藩が治安のために村内の富農的有力農民を把握し、戦力に編成したものであり、富農層自身も「世直し」一揆による打こわし対象者であり、砲術稽古に参加することは自らの階級的防衛措置でもあった。

八月二十九日には井伊家江戸屋敷代官広田常平よりの「口達先」として、「世田谷村」^江新規角場御取建二相成公役衆出来形見分も相済候間、以来玉目共外伺済之通り相心得（以下略）とあり（六七項）、「角場」とは砲術稽古をする場所であり新規に作られたことがわかる。

一月一二日には代官所より「来ル十八日 御中屋鋪」^二而銃隊惣調練有之二付、朝五ツ時御同所^江相揃候様其方共々外村々稽古人共^江通達および、一同右刻限不遅様相揃可申候、尤雨天二候ハ、日送り之積ニ相心得

可申候」とある（八八項）。そのためには世田谷代官所大場弘之介門前に正六ツ時（午前六時）に集合し、中屋鋪二五ツ時（午前八時）に到着するのである。

二月四日には、代官所よりの申渡しで砲術稽古人に対し苗字帶刀を許しているのである（九七項）。

今般從 公刃被仰出候御取締之義二付^而ハ、最寄騒ケ數節ハ公役衆^ハ人数^操操出方打合候旨二付、兼而砲術稽古被仰付候もの^江江当分之内帶刀 御免被 仰付候間、其旨可相心得、依^而ハ急変之節掛合次第早飛脚を以触達候間即刻可罷出候、勿論相渡置候御鉄砲并玉薬其外附属之品無失念其節持參可致候、不容易御時節一同御用向実意ニ相心得、都而御取締向聊成儀二候共心附キ候ハ、無遠慮可申聞候
右申渡し候、以上

丑十二月四日

御代官所印

右御領分式拾ケ村永上金名主・平名主・永上金年寄・平年寄・永上金小前都合四拾四人江被仰渡候間、左之通り御受印形差上申候（以下略）

こうして、砲術稽古人は「帶刀」を許されることにより、領主側の立場で「急変」の時は鉄砲玉薬等を持參して駆付る義務を追わされたのである。

また、砲術稽古人の「御締方肝煎役」として用賀村名主飯田麻次郎を「重立」として、世田谷村名主松本宗八・弦巻村名主鈴木安太郎・野良田村名主粕谷与一右衛門が任命された（九七項）。

この砲術稽古人は、各自、銃と玉薬を日常も預りおき、「多摩川通り廻村日割」に依じて、領内の威庄巡回を行い、また慶応元年二月一五日の「世田谷市」の取締りにも出張しているのである（一〇六項）。

二月一四日の用賀村名主飯田麻次郎の廻状として、「明十五日世田谷市為取締鉄砲稽古二御出被成候通り之支度

二而、明早朝各々方世田谷^江御出張可被成候様申上候（以下略）とあることが注目される。

一二月二五日には飯田麻次郎から「砲術稽古角場掛諸入用之内耆人ニ付金貳分ツ、御出金（中略）、就^而ハ御師範之御方々様^江御挨拶として明後廿七日出席致候ニ付^而ハ、明廿六日取集人相廻し申候、其節御出金可被下候」とあり、角場掛諸入用金と師範方の謝金を徴収しているのである（二四項）。

慶応二年の「御用状留記」の正月一四日には、代官所から「来ル十九日砲術稽古始致候趣申来り候間、其旨稽古人共^江申通無不参朝五ツ時可罷出候（以下略）」と新年の初稽古の通達である（二項）。

正月一七日には弦巻村名主鈴木安太郎からの廻状で、「陳ハ明十八日御中屋鋪ニおゐて砲術稽古御座候由御達御座候間、御村々御一同昨年之通り御支度被成明早朝御出勤可被成候（以下略）」とある（二項）。

二月二六日には代官所から「砲術稽古人共御褒美頂戴仕程之御趣意相弁、農隙之内可成丈出精可致、尤其筋^を申来候義も有之厚相心得候様可申付候（以下略）」と出精方の達書が出されている（二八項）。

四月四日には角場御用掛りからの廻状で、「砲術稽古之義追々農繁迷惑ニハ候へ共、可成丈操合出張いたし候様高仁啓介様より申来候間、此段御達申上候、尤来月^を農繁中月三講位ニも可相成哉、当分之内御出精被下候様いたし度夫々無洩御申通可被下候（以下略）」とあり（三九項）、農繁期の砲術稽古は農民にとつて大変な迷惑であったことがわかる。慶応元年八月の開始から同二年四月二七日まで三九回にわたり訓練が実施され、この間稽古人の延べ参加数は一、〇八五名¹⁰で、出席率は約六〇パーセントであつた。農民たちにとっては、必ずしも歓迎されているものとはいえない。

五月には西洋銃隊訓練が華美な品や服装となることを禁止し、幕府から次のような触書が出ている（五八項）。

西洋流録調練之儀ハ外国之利器要術を採、御国之御武備一際御厳整ニ可遊御趣意を以先年中^{（統録）}原御世話も有之事ニ^{（厚）}

付、右御趣意相心得勉勵可致ハ勿論ニ候へ共、近來習練之道実珍失虚飾ニ流兎角新奇を好自己之工夫等取交遊戯等同様之舉動いたし、又は從來之御制致不雇外国人ニ齊之服着用候向も有之哉ニ相聞、漸々土風をも破り且一揆之御趣意ニモ相振以之外之事ニ候、以来形善ニ不拘真実ニ修行致筒袖棟股引之類異様仕立并花美之品一切相止、都而練服類稽古之外平生猥ニ着用候儀不相成候（以下略）

砲術稽古人や農兵らの姿が一般に異和感を与え、かえつて反感を招くことを恐れたのだろうか。

さて、慶応二年（一八六六）六月一三日から一九日にかけて、いわゆる「武州世直し一揆」が蜂起し、武蔵国一四郡・上野国二郡を席卷し、四五〇軒余りの豪農・村役人・代官陣屋などを打ちこわした。

この一揆の防衛・鎮圧に砲術稽古人等は総動員されたのであった。その詳細については別稿にあるので、ここでは簡単に述べることにする。

六月一七日には代官所から「以急状申達候、然は急御用ニ付稽古人共仕度之上、此状着次第上宿可罷出候」とあり（六六項）、同日世田谷村組合寄場大小惣代役人より、「大急御達申候、悪党共多人数ニ而打毀乱入追々近組合江押寄候趣諸方注進手筈方申参、弥以急変片時も難通ニ付、兼而駆付人数触込度程ニ候得共、各方江即刻御引合御締方御相談致度、此状披見次第寄場世田谷村江御役人衆御老人ツ、御詰合被成下候様大急御達申上候」とあり（六七項）、ついに、砲術稽古人出動のその日が到来したという思いのするものである。しかし、実際には「世直し」勢は世田谷領へは侵入せず、この段階では世田谷辺からも呼応する者もいなかった。それ故、稽古人らも、もっぱら一揆勢と対決することなく警備態勢で終始した。前掲の「練兵館高嶋流砲術稽古出席名前帳」の末尾、慶応二年六月一七日の項には「悪党共多人数所沢辺追々近辺江参候趣ニ付、御領分和泉村河原大蔵村出張可致旨、砲術稽古人一同江被仰付、則出張左之通り、メ三拾五人、外人足大勢出ル」とあり、まさに「武州世直し一揆」の鎮圧に即応した姿勢をみるこ

とができる。

さて、八月二日には代官所から「稽古人共^立相渡置候御鉄砲并小道具共取揃、明廿三日朝五ツ時迄二上町^立持参可致候、尤急御用ニ付九ツ時迄ニ御鉄砲方^立相納候様申来候間（以下略）」とあり鉄砲の回収を命じている（九四項）。

翌九月には世田谷領の豪農であり、文政一〇年（一八二七）以来、彦根藩へ一〇〇両以上を献金した「永上人」たちの倅等一三人は、世田谷代官所に舶来新鋭のミニール銃二五挺を献納した（一二三項）。

乍恐以書付奉願上候

一鉄砲式拾五挺 但御用并ニ罷成候品

但、ミイル筒

右は世田谷御領分村々左之名前之もの共一同奉申上候、当今御時柄奉恐并為御冥加前書之品奉献上度一同奉願上候（以下略）

前述のようにこれまでの銃は鉄砲方に回収されたが、これらの鉄砲は長州征討の武器にふりむけられたのであった。幕府軍の武器の不足を補うものとして「永上人」たちは最新ミニール舶来銃を献上したのであった。そのことは、次の九月九日の沢村角右衛門よりの申渡書の記載によって判明する（一二四項）。

世田谷御領分

用賀村麻次郎倅

名主見習

飯田安之丞

外拾貳人

右之ものの共御時節柄奉恐并為冥加、ミニール舶来筒式拾五挺献上仕度願出候間、御取入ニ相成候様被申出、右ハ當時之形勢深心痛致候所^ハ献上之儀申出候ハ実々奇特之義ニ有之間、御取入早速戦地^江相廻し御用立可申候、此段不取敢申渡置可被申候事（以下略）

「早速戦地^江相廻し御用立可申候」とあるのがこのことを示している。

一月一二日には「陣中之服御改革被仰出候間、以來新調ニ被致候向ハ相改可被申候、尤平日は銃隊稽古ニ着用不苦、其外ハ着用無用之事」として筒袖図・小袴・胴着・タチツケ・御足輕筒袖羽織・陣股引等の詳細な説明が付されている（一三四項）。

しかし慶応三年四月には「筒袖胴着杜丹^{（杜）}メ笛等都而異服ニ似寄ル服ハ不相成候」と規制された（慶応三年「御用状留記」六一項）。

二月朔日には、井伊家よりミニール筒献上者に対し褒美が申し渡された（一四二項・一四四項）。それによると、第4表のとおりである。用賀村名主見習飯田安之丞は佐野綿三把、上野毛村田中左内と大蔵村安藤兵五郎は佐野綿一把、他の苗字のない者には「苗字御免」が与えられた。また、田中左内と安藤兵五郎の兩人には「年頃ニも有之間親名主役見習申付候」とある（一四五項）。

これらの褒美品は二月二四日に出頭して下付された（一五一項）。

慶応三年の「御用状留記」の二月三日には、幕領に「農兵」設置が指令され、下沼部村兵左衛門から栄次郎（下野毛村名主）・麻次郎（用賀村名主）・久次郎の三人に宛、問合せの書状が出されている（六項）。それによると、「今般御料所村々^江農兵御取立ニ付組合相定仕法可申立旨被仰触、然処去寅年中御代官今川要作様^ハ寄場世田谷村江村高・家数・人別等御取調御座候次第、右ハ万一非常之節防方等御用弁節筋御取立ニ相成候様子ニ付、其御領分之義ハ是迄御

第4表 ミニール献上者とその褒美

村 名	役 職 名 前	褒 美
上野毛村	名主七左衛門伴田中左内	佐野綿1把
大 蔵 村	名主六右衛門伴安藤兵五郎	同上
用 賀 村	名主麻次郎伴 名主見習飯田安之丞	佐野綿3把
用 賀 村	同人弟啓次郎	苗字御免(飯田)
用 賀 村	年寄 大三郎	同上
鎌 田 村	年寄 藤右衛門	同上(橋本)
岩 戸 村	年寄 長右衛門	同上
猪 方 村	年寄 文平	同上(小川)
猪 方 村	年寄 金三郎	同上
猪 方 村	組頭 滑平	同上
馬引沢村	組頭 治三郎	同上
和 泉 村	年寄 作平	同上(石居)

(注) このほかに下野毛村年寄原栄次郎も入るが記載がない。

調練も出来二付別段御取立ニ相成候哉、又ハ御料所村々江御組合ニも被成下候思召ニも御座候哉、御存慮相伺度、尤当組合之義ハ御存之通り小組^ニ而隊組も出来兼候ニ付、御存意如何とハ乍存此段相伺申候、何分ニも可然御相談之上御挨拶被成下候様奉願候(以下略)とあり、幕領の農兵設置が組合村で編成されとのことで、井伊家世田谷領村々もこれに含まれるのか、井伊家世田谷領村々では、すでに砲術調練を実施しているので除外されるのか等、その意向を打診しているのである。

すでに、幕府も大名も領内の有力農民に鉄砲などを所持させ武装化させなければ、幕末動亂の治安に対応できなくなってきたことが判明する。

注

(1) この七冊の「御用留」は「世田谷区史料叢書」第八巻（東京都世田谷区教育委員会、一九九三年三月発行）に収録した。小稿は、その解説論文を骨子として増補改稿したものである。本叢書の編集を担当された世田谷区立郷土資料館、とくに区専門委員池上博之氏には種々お世話になった。記して感謝の意を表するものである。

(2) 「佐野市史」通史編下巻、二〇―三四頁

(3) 「ふるさと栃木県の歩み」三〇八頁

(4) 前掲書（注3）三〇九―三一〇頁

(5) 「世田谷区史料」第三集三三〇―三三二頁

(6) 拙稿「文政改革と関東農村——幕末期の対外危機と組合村の武装編成——」（村上直編『論集関東近世史の研究』三七―三七六頁、名著出版）

(7) 「新修世田谷区史」上巻一一三―一二三頁

(8) 拙著『幕藩制国家の基礎構造』五六八頁、吉川弘文館

(9) 「世田谷区史料」第三集三三二―三三六頁

(10) 前掲書（注9）三三三頁

(11) 拙稿「世直し」への動き」（『せたがやの歴史』二二〇―二三三頁）